

## 報告

## 2023年度アク・ベシム遺跡発掘調査によって発見された唐代関連資料について

山内 和也\*・齊藤 茂雄\*・中山 千恵\*・望月 秀和\*

\* 帝京大学文化財研究所

はじめに

- I. AKB-15区（シャフリスタン2）の調査
- II. 文字が記された瓦の断片（整理番号：15-P10-63）
- III. 漢語碑文の断片

IV. 碑首の断片

V. 奇石の破片

おわりに

## はじめに

帝京大学シルクロード学術調査団は、キルギス共和国国立科学アカデミーと共同で、2023年4月19日（水）から5月19日（金）にかけて、中央アジアのキルギス共和国北部、チュイ州に位置するアク・ベシム（スイヤブ）遺跡で調査を実施した（2023年度春

季調査）。シャフリスタン2（碎葉鎮城）の中核部（AKB-15区）での発掘調査では、唐王朝の進出を直接示すいくつかの資料が出土したことから、本稿ではその概要について、速報として報告する。なお、詳細については、今後刊行予定の報告書をご参照願いたい。

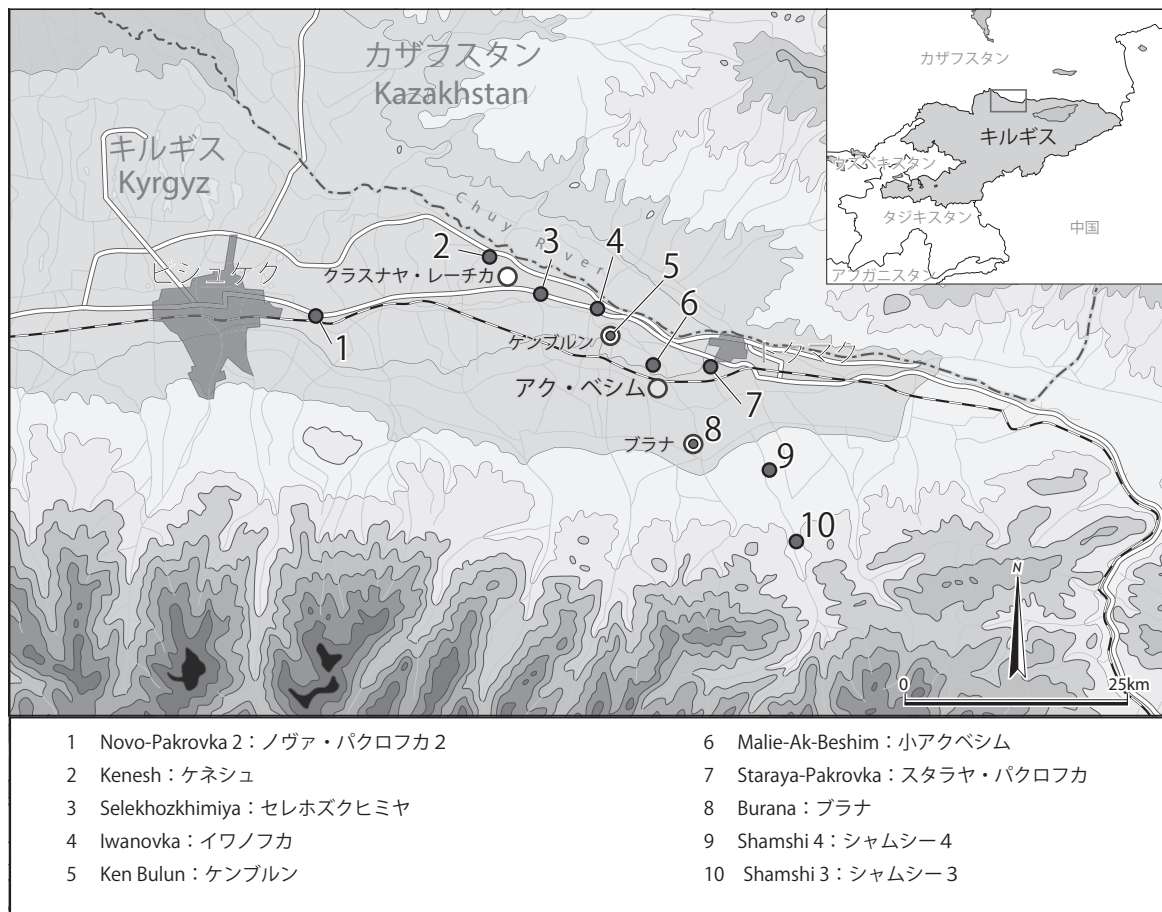


図1 アク・ベシム遺跡と周辺の遺跡

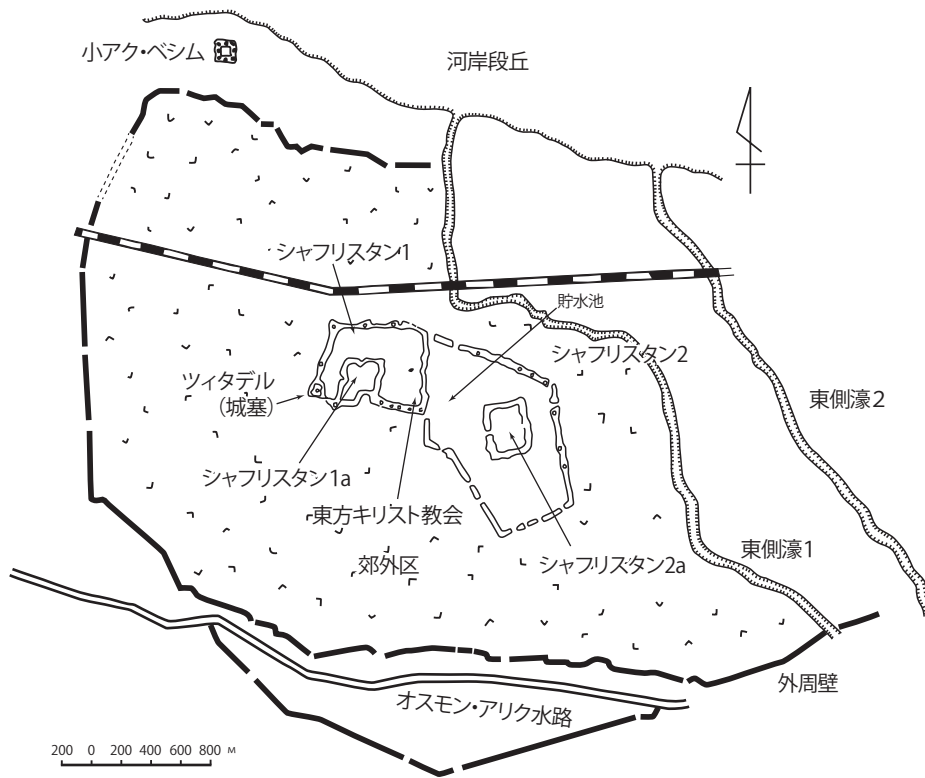


図2 アク・ベシム遺跡全体図および呼称



図3 アク・ベシム遺跡の発掘地点番号

## I. AKB-15区（シャフリスタン2）の調査

AKB-15区はシャフリスタン2の中央部、やや北側に位置し、唐が建設した碎葉鎮城の中枢部にあたる（図2、3）。AKB-15区では、これまで確認されていた第1号基壇の南縁の南約18mで、東西方向に伸びる壁の存在が確認された（図4、5）。この壁は、基壇の位置する中庭と、さらに南側に位置する中庭とを仕切る壁の基礎であると推定される。幅

は約3mで、唐尺の10尺に相当するものと考えられる。

この仕切り壁の南側および想定される南門の西側では数多くの瓦片や大小さまざまな石（いわゆる川原石や建築資材としての石材の破片）に加え、文字が記された瓦の断片や漢語碑文の断片、螭首（碑首）の断片、さらにはいわゆる「太湖石」を彷彿させる奇石・怪石の断片が出土した。以下にその出土品の概要について述べる。



図4 仕切り壁とその南側の遺物出土状況



図5 仕切り壁南側の遺物出土状況



## II. 文字が記された瓦の断片

（整理番号：15-P10-63）

文字が記された瓦の断片が1点出土した（図6）。瓦の種類は丸瓦であり、2017年に出土した「懐」の文字が記された瓦と同様である（図7）。円弧上になった丸瓦の外側の面に鋭利な器具を用いて鋭い筆致で文字が刻まれている。

瓦の大きさは、横9.5cm、縦5.2cm、文字の大きさ横2.9cm、縦2.9cm（ただし、下端はわずかに破断）。文字の右側（つくり）は「𠂔」の異体字と見て間違いない。左側（へん）は一部破断しており明瞭ではないが、現時点では「月」と見ておきたい。すなわち、文字としては「𠂔」と解釈し、瓦を作成した工匠の名前ではないかと推測する。向井佑介（『中国北朝における瓦生産の展開』『史林』87-5, 2004, p. 20）は、瓦製作の際に粘土板を分割する削人や、瓦の表面を磨く昆人が瓦に篋書きする場合、粘土の乾燥が進んだ後になるため細く鋭い筆致になると指摘しており、本断片も削人や昆人の手による可能性がある。ただし、向井が検討したのは北朝の瓦であり、唐代にも当てはまるのか今後の検討が必要である。

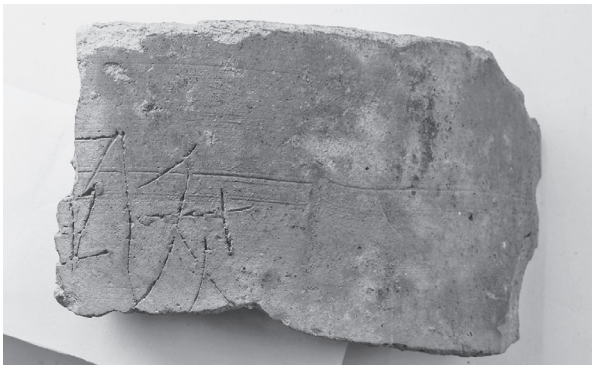


図6 文字が記された瓦の断片

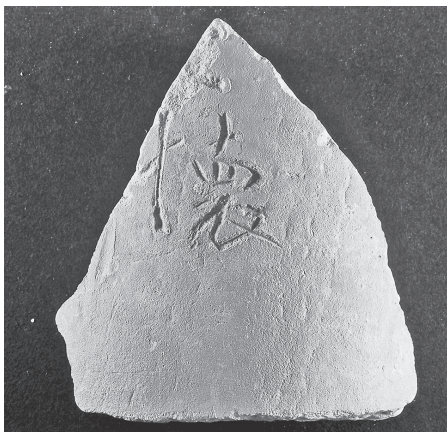


図7 「懐」の文字が記された瓦の断片

## III. 漢語碑文の断片

文字の存在が確認できる漢語碑文の断片が4点出土した。アク・ベシム遺跡では、これまでも漢語碑文（「杜懷宝碑」等）が見つかったが、いずれも偶然発見されたものであり、今回の碑文のように学術的な発掘調査の過程で発見された例は初めてである。

出土した漢語碑文は、いずれも赤い砂岩に記されたもので、同一の碑文の断片である可能性があるが、これらの断片から全体の大きさや文字数等を推定することは不可能である。この赤い砂岩の石は、別の碑文（「杜懷宝碑」等）や仏像（ベルンシュタムが発掘した仏教寺院出土）にも用いられていることから、漢人によって好まれたものであるといえる。文字の大きさについては、文字によってばらつきはあるもの、縦の長さは2cm～2.5cm、行間は1.5～2.0cmとなっている。

確認される「軍事」や「蕃」といった文字から推定すると、唐軍の西方進出、つまりその当時この地域を支配していた西突厥に対する軍事侵攻に関わるものと推測されるが、発見された断片の数が少ないため、その内容については不明である。

また、碑文は、719年に唐軍が碎葉鎮を放棄した後、碎かれ、棄てられたものを考えられるが、それがどの時期に行われたかについては不明である。後述のように、今回の発掘では、碑文の上部を飾っていた螭首（碑首）の破片も見つかっていることから、唐軍が撤退したのち、唐軍や唐王朝による支配を象徴するような碑文等は破壊され、棄てられたものと考えられる。

### III-1. 漢語碑文断片1（整理番号：15-T2-S01）

大きさは、縦7.4cm、横4.9cm、奥行き2.8cm、重さ92.6g（図8、9）。録文は以下の通りである。

1.1 軍事□ [

1.2 □<sup>?</sup>豹 [

「軍」、「事」はともに文字幅縦2.0cm、横1.5cm。行間1.0～1.2cm。2行目2文字目は「豹」としたが、「狗」などの可能性もある。





図8 漢語碑文断片1 (写真)



図9 漢語碑文断片1 (拓本)

Ⅲ-2. 漢語碑文断片2 (整理番号：15-P11-S01)

大きさは、縦7.4cm、横5.4cm、奥行き4.5cm、重さ177.6g(図10、11)。録文は以下の通り。

- 1.1 ] 且 抄
- 1.2 ] □ 蕃

1行目の手偏の部分は、文字幅縦2.0cmで、横幅は完存しておらず、計測できない。行間1.0cm。1行目1文字目の「且」は「亘」などの可能性もある。2行目1文字目は「況」や「光」などの可能性がある。断片1と断片2は文字の大きさ、行間の幅がほぼ同じで、文字の形状も似ているため、同一碑文であると考えられる。なお、下部の空白が大きいことから、行末と見られる。



図10 漢語碑文断片2 (写真)

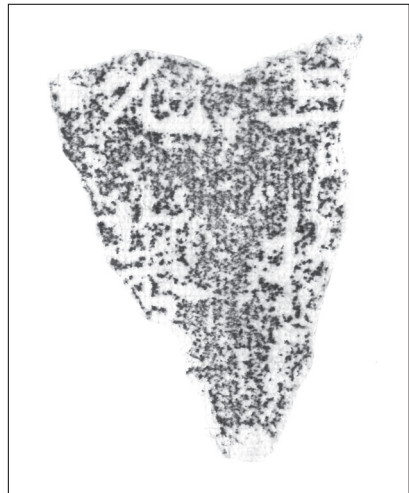


図11 漢語碑文断片2 (拓本)

Ⅲ-3. 漢語碑文断片3 (整理番号：15-T2-S02)

縦11.0cm (うち、碑文がある部分の長さは最大6.1cm)、横6.4cm、奥行き2.6cm、重さ176.3g (図12～15)。左端は残存しており、成形された端部であることから、碑文の最終行であることが分かる。録文は以下の通り。

前面

- 1.1 ] 謙□ [
- 1.2 ] 騎将 [
- 1.3 ] □字<sup>刻?</sup>右 [

左側面

- 1.1 □少利 [

左端が残存しており、成形された端部であることから、最終3行分であることが明らかであり、また最終行である3行目に「字」という文字が見える。碑文の最終行に字を彫った職人(刻字)の名を刻む

ことがあるため、「字」の上の字は「刻」と推測される。また、「右」以下には、「刻字」の肩書きと姓名があった可能性がある。その前の何行かは、碑文の末尾に書かれる「銘」と呼ばれる韻文であった可能性がある。

2行目の「騎」は縦2.0cm、横1.5cm。3行目の「字」は縦1.5cm、横1.2cm。行間は、1-2行目0.5cm、2-3行目0.7cmで、3行目から石の左端まで1.0cmである。左端側面の幅は2.2cm。3行目の文字は小



図12 漢語碑文断片3 (写真)



図13 漢語碑文断片3 (拓本)

さくかつ行間も短いので、刻人の情報であればそこだけ文字を詰めて書いても矛盾はない。

左側面には2文字が見える。「利」は縦1.5cm、横計測不能、行間計測不能。「利」の上の文字は「妙」・「砂」・「沙」などの可能性がある。利の下には2文字分ほどの空白があるため、碑文の下端と思われる。

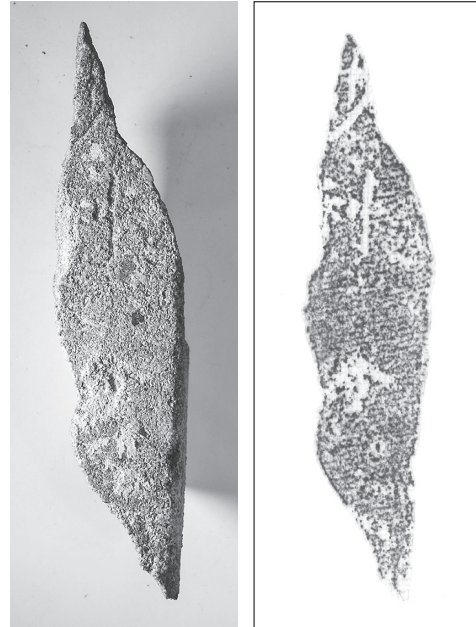


図14 漢語碑文断片3側面 (写真) 図15 漢語碑文断片3側面 (拓本)

#### Ⅲ-4. 漢語碑文断片4 (整理番号：15-T2-S03)

大きさ縦2.9cm、横4.4cm（うち文字が書かれていた平坦面2.0cm）、奥行き1.6cm、重さ19.2g(図16、17)。「義」という文字の左半分が見える。文字の大きさ縦2.0cm、横計測不能、行間計測不能。

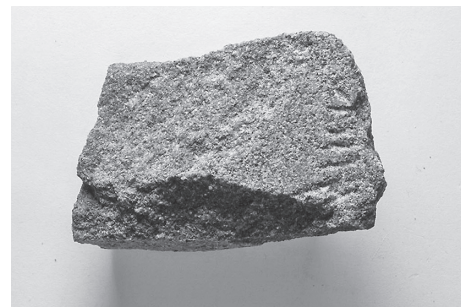


図16 漢語碑文断片4 (写真)



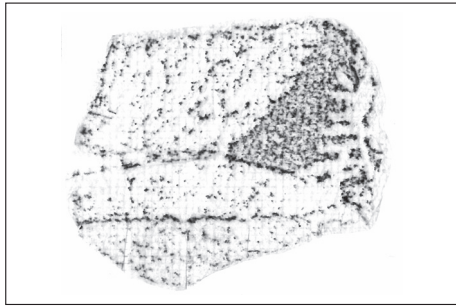


図17 漢語碑文断片 4 (拓本)

#### IV. 碑首の断片

明らかに碑首の断片であると推定される石材が2点出土した。この碑首も赤い砂岩で造られている。いずれも小さな断片であるため、この断片のみから全体の形状を復元することは難しい。他方、かつて同じくアク・ベシム遺跡から出土した碑首があり(図18)、現在プラナ博物館で所蔵・展示されていることから、この碑首と比較することで、全体の形状を想定することが可能である。

上述の通り、碑首は故意に破碎されたものと推測される。以下に、その形状が比較的明らかなもの2点を紹介する。



図18 アク・ベシム遺跡出土の碑首 (プラナ博物館)

##### IV-1. 碑首断片1 (整理番号: 15-T2-S08)

断片ではあるが、碑額の一部の可能性がある(図19、20)。右端に見えている2本の線を陽刻された文字ととらえ、篆書体の石偏の一部と見なす。その場合、碑額で最もありうる石偏の文字は「碑」であろう。「碑」だとすれば、碑額の左下端部である可能性が高い。縦14.5cm、横11.0cm、奥行き4.5cm、

重さ775.4g。石偏のはらいと想定される左の線の長さは縦5.9cm、線の太さ1.0cm。



図19 碑首断片1 (写真)

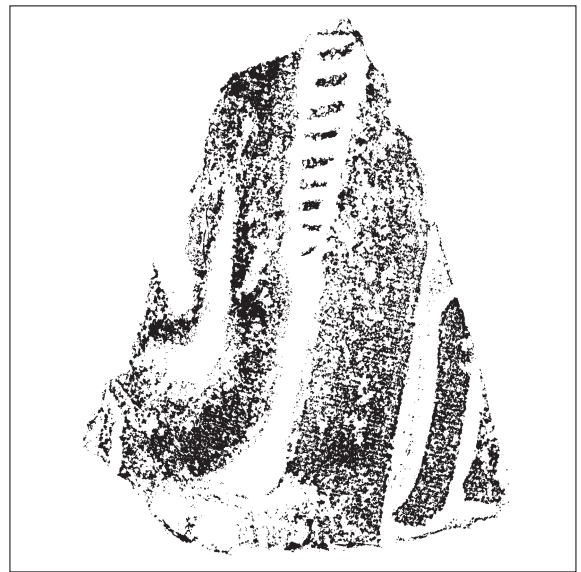


図20 碑首断片1 (拓本)

##### IV-2. 碑首断片2 (整理番号: 15-T2-S09)

鱗状・ひげ状の表現がある断片で、螭の身体の一部と考えられる(図21、22)。縦10.0cm、横5.5cm、奥行き3.0cm、重さ183.6g。



図21 碑首断片 2 (写真)



図22 碑首断片 2 (拓本)

## V. 奇石の破片

発掘調査では、灰色の砂岩の大小の破片が多数出土した（図23～24）。これまでの調査でもこの灰色の石の小さな破片が数点出土していたものの、この石が何なのかは不明であった。しかしながら、2023年の発掘調査で大きい破片が出土したことから、この石は、いわゆる「奇石・怪石」の類であると推定することが可能となった。

おそらく、かなり大きな奇石が存在しており、それが破砕されたことで、大小の破片になったものと考えられる。なお、それが1つであったのか、複数存在したのかは判断できない。また、これらの奇石の破片の多くは、基壇の南側に位置する仕切り壁の南側から集中して出土していることから、奇石は基壇があった区域に付属する南門の外側付近に置かれ

ていたものと想定されるが、現時点ではその位置を特定することはできない。

発掘で出土したこの石はイッシククル湖岸から運ばれたものと推測される。実際にイッシククル湖岸ではこの石に類するものが至るところに存在する。他方、これらの石は同じような石ではあるものの、その地点によって差異があることから、碎葉鎮城址で見つかったこの石の採掘地点を特定するためには今後の調査が必要である。

「太湖石」に代表されるように、中国では奇石や怪石といったものが珍重されることは良く知られている。いわゆる「太湖石」は中国の太湖とその周辺から採取される石灰岩で、中国の庭石としては最高級のものとする。一般的に、その流行が唐代後半期の白居易以前には遡れないことから、白居易が広めたともなされている。しかしながら、実際には白居易が直接広めたとは言い切れず、8世紀後半から9世紀前半頃に流行し始めたという指摘もある（外村中「明末清初以前の中国庭園における太湖石について」『ランドスケープ研究』59-1, 1995, p. 28）。

しかしながら、11世紀の北宋蘇轍の詩「子瞻喜雨亭北隋仁壽宮中怪石 [子瞻（＝蘇轍の弟、蘇軾の字）の喜雨亭（＝蘇軾が鳳翔に建てたあずまや）の北にある隋の仁壽宮（＝九成宮の前身）の中にある怪石]」（『欒城集』卷二）には、「仁壽宮中穉穀生、太湖蒼石草間横 [仁壽宮中には雑草が生え、太湖の蒼石は草むらの中に横たわっている]」とあり、唐の離宮である九成宮に太湖石が存在していたことが詠まれている。九成宮では1978年に4号遺址の発掘が行われ、唐の高宗期に比定される遺構から実際に太湖石が発見されている [中国社会科学院考古研究所（編著）『隋仁壽宮・唐九成宮—考古発掘報告—』科学出版社、2008, pp. 74-76]（図25）。

碎葉鎮城址で出土した石は「太湖石」ではなく、また出土した石の断片から全体の形状を復元することはできないものの、碎葉鎮城址で「奇石」が出土したということは、中原から遠く離れた西方の軍事拠点にも中国人の趣味・趣向を象徴するものが持ち込まれていたこと示すという意味で、とても重要な資料といえる。



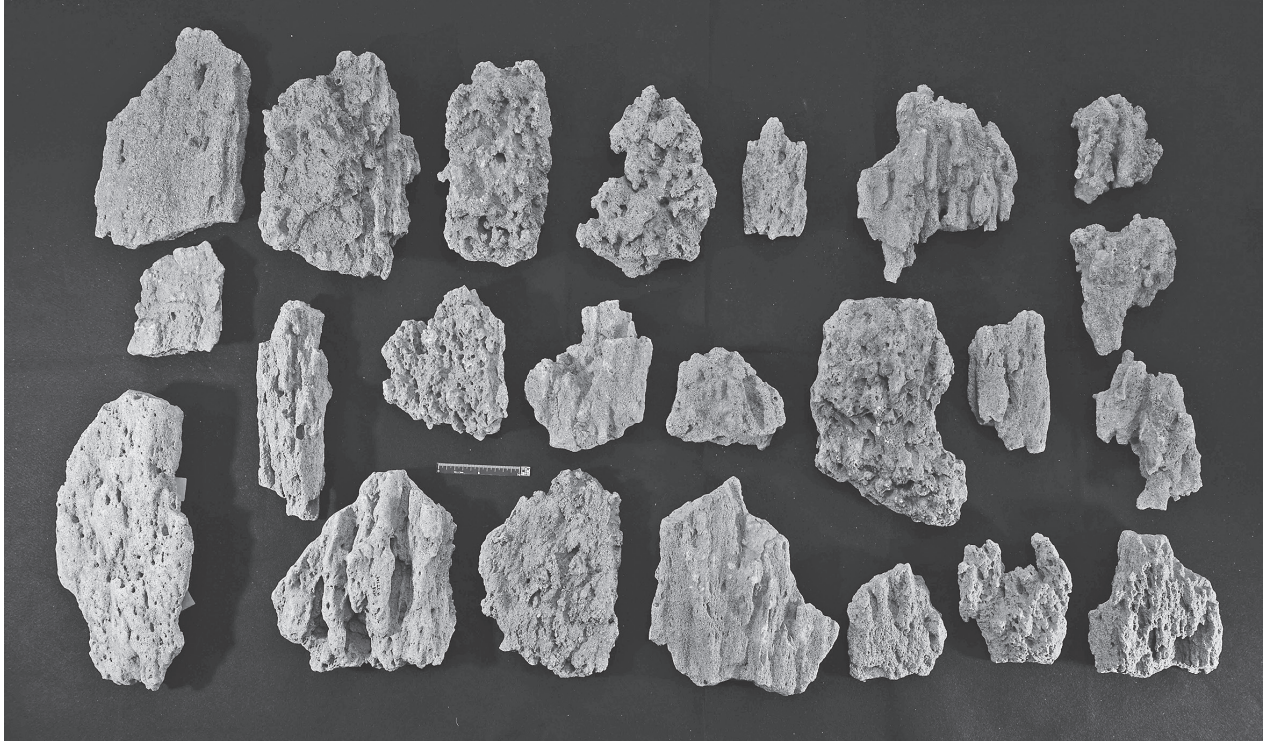


図 23 奇石断片



図 24 出土時の奇石断片



図 25 九成宮出土の太湖石（同書, P1.3）

## おわりに

シャフリスタン2のAKB-15区では、これまでも唐代の瓦の破片が大量に出土しており、また「懐」の字が記された瓦片も出土している。それに加え、2023年春季の調査では、文字が記された瓦片、漢語碑文の断片、碑首の断片、そして奇石の断片が相継いで発見された。これらの出土品は、碎葉鎮城にいた漢人の存在を示す重要な証拠でもあり、また、中原から遠く離れた西方の辺境にあった碎葉鎮城に漢人の趣味・趣向が持ち込まれていた証拠でもある。

2023年の発掘では、これまで不明であった中枢部の構造、建物の配置についても、少しずつではあるが、明らかとなってきている。今後の発掘調査では、漢人の存在を示す資料のみならず、碎葉鎮城とは何であったかを明らかにするような発見が期待される。